

# 巴 杏

三次地区医師会報

No.168

令和2年3月発行



# 外科医のメスに国境はない

## ～荒瀬秀俊 伝～ その3



荒瀬秀治 著

溝田忠人・溝田武人 編集

### 編集者補足 三次収容所のスケッチ

POW研究会の小宮まゆみさんの詳細な報告<sup>13)</sup>によると、三次収容所に抑留されていた、医師のヘリット・ファン・クーフェルデン氏は抑留当時、収容所の内外のスケッチを描いていた。そのスケッチのオリジナルはアムステルダムの「NIOD」(オランダ戦争資料研究所)にある。そして以下のような経緯で、現在三次図書館にそのコピーが公開されている。

2016年6月3日のこと、小宮さんはアムステルダムのNIODで行われたシンポジウムで「日本国内に抑留されたオランダ人民間人」というテーマで講演を行った。その聴衆の一人にヘリットさんの息子であるヤン・ファン・クーフェルデン氏が来ていた。ヤンさんは抑留されたオランダ人の名簿や父親が描いたオプテンノール号のカラースケッチや三次収容所内外のスケッチを、ハーグの公文書館から取り寄せて持参していた。

1938年生まれのヤンさんの一家はオランダ領のスマトラ北部に家族3名で住んでいた。父親のヘリットさんは医師であったが、1941年12月8日に日本との戦争が始まると、オランダ海軍に召集されオプテンノール号に乗り

組んだ。1942年2月28日には日本軍に拿捕されてオプテンノール号と共に日本に送られ、三次収容所に44名の仲間と共に収容された。一方ヤンさんとお母さんはスマトラ北部の民間人抑留所に収容された。1945年8月15日の終戦後、父親は9月12日に三次収容所を離れて、バタビア(ジャカルタのオランダ植民地名)に戻って来て海軍で勤務していた。別れて4年振りに母子は父親に再会したのである。その2年後一家はオランダに引き上げてきた。父親は1979年頃74歳で亡くなられ、母親は1996年に89歳で亡くなられた。

2016年8月末には父親が収容所生活をしている時期に画いた前述の素晴らしいスケッチのコピーなどを小宮さんに郵送された。一枚はカラーインクで描いたオプテンノール号であった。この時の10枚のスケッチを以下に示す。図 補足3a～iはヘリット・ファン・クーフェルデン氏による三次収容所のスケッチ。図 補足3jは、同じく同氏によるオプテンノール号のカラースケッチ。図 補足3kは2本煙突に改造される以前のオプテンノール号の写真である。

Myoshi, 1944

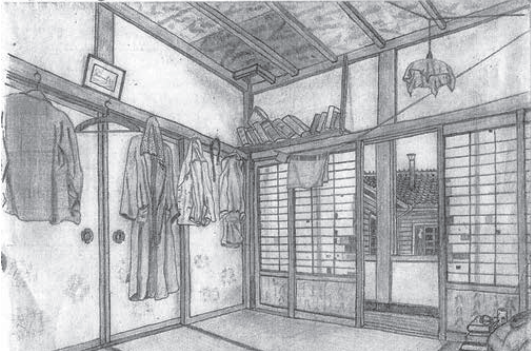


図 補足3a 三次収容所の室内の様子(1)

Myoshi, 1944

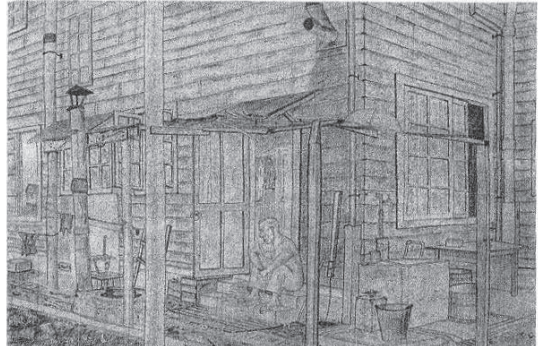


図 補足3d 戸外で孤独に耐えている様子か？

Myoshi, 1944

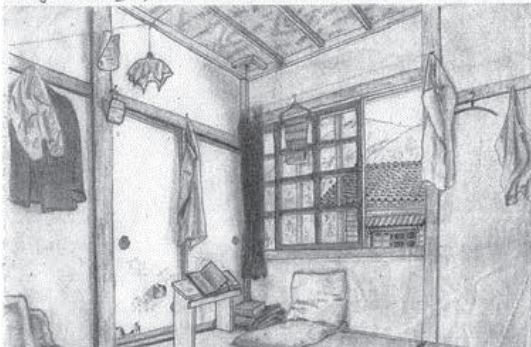


図 補足3b 三次収容所の室内の様子(2)

Myoshi, 1944



図 補足3e 収容所建物スケッチ(1)

Myoshi, Oct 1944

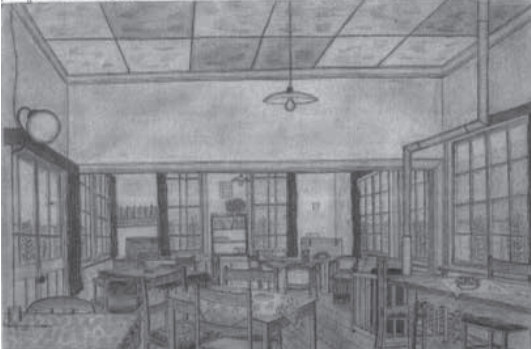


図 補足3c 三次収容所の室内の様子  
娯楽室であろうか？

Myoshi, Nov 1944



図 補足3e 収容所建物スケッチ(2)  
尾関山に入る三江線のトンネル部分が  
画かれている。



図 補足3g 収容所建物スケッチ(3)  
背景は寺戸山(てらどやま)別名は三勝山(さんしょうじやま)左の建屋屋根背景が比熊山



図 補足3h 収容所建物スケッチ(4)



図 補足3i 江の川にかかる祝橋のその手前の老舗料亭&旅館「環翠楼」  
(スケッチは未完成で下半分は白紙である)

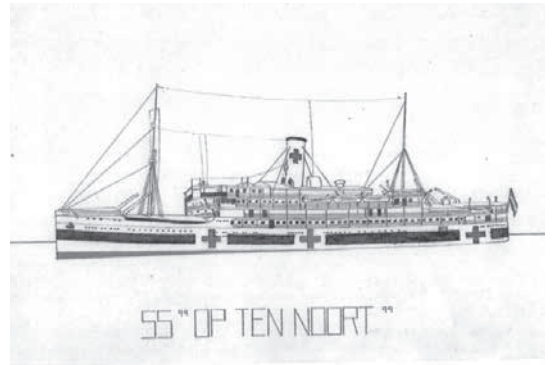


図 補足3j オプテンノール号のカラースケッチ



図 補足3k オプテンノール号の写真  
2本煙突に改造される以前の写真

その後、小宮さんは、ヤンさん自身に三次を訪問して頂くべく、日本の外務省の招聘事業を紹介するなど手を尽くされた。ヤンさんは2016年の末には「息子と自費で日本に行く」と連絡して来たが、その後、健康上の理由で、来日できないという連絡があり、来日はかなわなかった。

そこで小宮さんはヤンさんの代わりに2017年5月31日～6月1日に三次を訪問し、米丸嘉一先生の案内で、三次図書館の有光七重館長にスケッチのコピーを届けた。館長からはスケッチを公開する約束を得ている。この時、荒瀬秀賢とも歓談している。これは2017年6月1日の中国新聞の記事<sup>11)</sup>にされ、同じく6月24日の朝日新聞大阪版の夕刊記事<sup>23)</sup>にもなっている。これが縁で、7月にはNHK福井支局から、製作中の番組、“病院船「オ

プテンノール号」の数奇な運命”に関連して、オランダのヤンさんに取材をしたいという依頼があった。小宮さんの仲介で、2017年8月5日にはアムステルダムに近いヤンさんの御自宅で3人のNHKスタッフによるインタビューがあった。9月1日になって取材を受ける元気そうなヤンさんをDVDで観たので感想をメールでヤンさんに送ったが、返事なかった。9月25日になってヤンさんの奥様のエキエ様から、ヤンさんが9月4日に心臓発作で亡くなったという悲しい連絡があった、ということなのである。

ここにもまた悲しいけれど不思議な偶然がある。オランダ側の当事者の一人、ヤンさんは父上の書かれた“スケッチ画”を三次収容所の近くの三次図書館に展示してもらうという希望が果たされることを見届けた後に、心臓発作でこの世を去っている。日本側では荒瀬秀俊の孫の荒瀬秀治が癌に侵されながら懸命に書き続けた“外科医のメスに国境はない”を我々に託し終えて、この世を去っているのである。

## 6. 荒瀬秀俊と荒瀬家の人々の思い出

以下に、荒瀬秀俊の甥である編集者の溝田忠人・武人兄弟の立場から記しておく。溝田兄弟からみて母方の伯父・荒瀬秀俊の家族は、妻喜代と2男1女(長男秀隆、次男敏博、長女貴子)で、伯父と子供たちは全て現在の三次高校の前身の三次中学および三次高女の出身であり、伯父と長男秀隆、次男敏博は東京医専(現東京医大)卒業の外科医である。また、孫の秀賢、秀治、貴子の長男澤裕幸とその長男澤宗寛も、東京医大卒である。

ここに 故 荒瀬敏博の文章<sup>21)</sup>を転載する。これは、1989年10月31日発行の「東京医大同窓会 広島県支部の歩」 131-134頁 に掲載されたもので、編集委員の一人には、荒瀬

秀賢も加わっている。この同窓会誌は、東京医大図書館に寄贈されたもので、荒瀬秀俊がスケッチしたラウベル解剖学教科書(巴杏167号参照)を探索する過程で東京医大図書館員の方がふと目にし、気になって中を読むと荒瀬敏博の一文が見つかった、というまるで故人達の引き合わせといえるような絶妙なタイミングであった。東京医大同窓会事務局には転載許可を戴いた。

### 6.1 親父、秀俊の思い出<sup>21)</sup>

昭和23年卒 荒瀬敏博

六月の中旬、金林先生より親父の思い出と題して何か書いてくださいとの電話があった。はい書きましようと言ってはみたものの、何から書いたら良いか困ってしまった。それ程父に関する話は多い。順序建てて書くのは難しいので、思いついたままを書くことにする。

今頃の季節になると、親父の血が騒ぎ虫が起きる。河漁、特に河川に恵まれた三次地方は魚が多く、鰻釣りは、名人芸であった。ハヤは浮子を見て釣るのであるが、我々が見たのでは解らない、動きを見逃すことなく釣り上げる。小生はハヤ釣りが好きでやってみたが、親父に遠く及ばず今日に至っている。それに鰻の穴釣りは、又名人の域に達していたように思う。鰻の釣鉤は自分の手製でない信用しない。自転車のスポークで作れ、麻糸をつけ出来上がり。それを自慢そうに見せるのである。それを褒めない機嫌が頗る悪い。その自慢の鉤を持って、お供を連れて毎日釣りに行く。小生も一緒に行き、色々教わったものである。そして段々と父の域に近づいて、小生が一尾でも多く釣ると機嫌が悪いのである。普通の親なら息子が多く釣れば、

よく釣ったと喜ぶものであると思う。然し父は何事でも息子に負けると腹が立つのである。そして何時もケチをつけるのである。

鮎の友釣りの頃になると、毎日釣りに行きたくてソワソワし出すのである。その時は行きなさいよと言うと、子供の様に喜んで飛んで行く。然し父六十歳の夏、昼食を済ませて川へ急いで出かけ、心筋梗塞で川辺に倒れた。幸い対岸に鮎釣りの知人が沢山居たので、すぐ飛んできてくれ看病をし、家に連絡をしてくれた。父は幸いその日は川に入らず岸辺に立って釣って居た。そして鮎がかかったので川を下り、鮎を網に入れて元の場所へ帰った途端倒れたと対岸で見ていた人が教えてくれた。幸い一命は取り止めたが、父が後になってその時のことを話した事がある。倒れたときのことをよく覚えていないが、医者である自分は、ここで狼狽したのでは恥になるから激痛をじっと我慢して取り乱す事はすまいと心に誓ったのだと。何時もなら川の中に入って鮎掛けはするのに、その日は対岸に釣人が多かったので反対側で釣っていたのが幸いした。川に入って釣って居たら間違いなく死んでいた事ことだろう。

父の趣味は川のみならず狩猟、主としてキジ、山鳥、シギ(編集注：鴨(シギ)ではなく、鴨(カモ)の間違いだと思われる)等が対象物であり、これもまた毎日毎日である。昭和初期の頃で自家用車はない。毎日タクシーで運転手を連れて歩くのである。これも毎日毎日よく続いたものだと感心して見ていた。余程元気な者でないといふと真似出来る芸当ではない。それに狩猟の腕も一級品であった。ある時はキジを丸羽も撃って来たのには驚いた。

父の事を褒めてばかりで恐縮に思うが、実際歌を唄う事を除けば何でもやった。中学校時代は柔道をやり、何時から始めたか定かではないが弓道もやった。絵も上手であり、毛筆も綺麗な字を書いた。東京医専創立当初の連判状の最初の書き出しは父が書いたと聞いていた。また解剖学の講義の時使用された図譜も父の筆になるものと聞いた。医療の面でも非常に勉強家であり、死の一年前までアメリカから取り寄せた原書を辞書片手に翻訳していた。外科のオペに使う機械でも色々工夫を凝らし便利なものを自分で作っていた。メスも自家製で、一本のステンレスに鋼を接続して自分で研磨し、よく切れるメスで開腹術に使っていた。切れ味が落ちると自分でまた研いで使うのである。その勤勉さと努力には今でも頭の下がる思いがする。然し父も一人の人間である。良い点ばかりである筈がない。父は生来短気者であった。それが一寸やそとの短気ではない。父の時代、広島県の北には外科医は多分父位のものと聞いていた。クランケには、的確な治療をするのであるが、一寸でも父の気に触る行動や話し方が悪いと瞬間的に父の激怒が大爆発するのである。あの頃、いや父が死ぬ迄、叱られない患者は居なかったであろう。あの炯々たる眼光で睨まれたら誰でも震え上がった。小生は毎日睨まれていた。田舎から患者が来るときは村によっては、村長の訓示があったと言う。村長「荒瀬に行ったら先生に決していらん事は言うな、黙って診て貰って来い」。これは嘘のような本当の話である。今でも父を知って居る人は、先生は本当に恐ろしかったと言う。家に来る連中も沢山あったが、特に開業当初より

出入りして居た人々は、父に先生とは呼ばず、親分と呼んでいた。幼い頃の小生は奇異に感じられた。父は人情家でもあり、金の無いクランケからは、一銭も取らなかった。人の面倒見も良かった。それで父の周囲には人が何時も集まって、何時も哄笑が絶えなかった。

父は英会話が話せた。戦争中三次町の尾関山と言う桜の名所があるが、そこにオランダの病院船の捕虜が、人数は一寸忘れたが軍医中將を頭に相当の人数が居た。その連中の中に病気になる人も居た。そして父のオペを受け良くなった者が三人位居た様に思う。こんな時に英語が喋れると言う事は、非常にプラスになる。父が英語を喋れた為に、彼、彼女等は助かったのである。

いよいよ彼らが母国オランダに帰る時、一夜送別会を催した。彼等は父に感謝の言葉を述べ、国に帰ったら必ず父を招待すると約束した。しかし、何年経っても招待状が遂に来なかった。ただし父はその事について一言も語ろうとしなかった。後に分かった事であるがオランダは日本に対して非常に敵愾心を持って居た事が報じられた。お国の事情があったので、招待状も出せなかったのであろう。

戦後間もない頃、当時の耳鼻咽喉科の教授広瀬隆先生と、お供として南原、蔵田両先輩が来られ、父といろいろ話された事もあり、その後、外科の故篠井教授、それに今尚元気で御活躍中の杉江教授も来広され、父と酒を痛飲され乍ら一夜を過ごされた事があった。あの当時が父の一番脂の乗った時ではなかったろうか。うれしそうだった父の顔が懐かしい。

父も昭和三十年夏、心筋梗塞で倒れてから段々と弱って行ったが、勉強だけは

続けて居た。毎朝毎朝当時としては、珍しいアメリカの外科の原書を読んで色々教えてくれた。今でも頭に残っているのは小児兎径ヘルニア変法は創痕も残さず比較的簡単なものであった。

父が死期が近づく頃、盛んに右腹を押えて居た。多分肝臓に変化が起こり痛みでもあったのだろう。それでも主治医の先生の目を盗んで川に山へと出掛けた。死ぬ迄それは続いたのである。父は昭和37年4月下旬アポで倒れ5月3日朝永眠したが、私の拙い文章では、表現できない豪放な数奇な生涯を閉じたのである。

父は広島県の同窓会会長を昭和初期より、井槌先生に受け継ぐまで二十数年勤めた様であるが、その頃は今の様な東医出身者は多くなかった。父がどの程度の事をして居たのか私は知らなかった。

話をするなら一晩かかっても語り尽くせない程の話があるが、いざ文章にするとなると実に拙い筆となって情けないと思います。

余暇を割いて書いた下手な文で御免なさい。

父の思い出の一旦にもなっていないと思いつつ筆をおきますこと重々お許しください。

## 6.2 溝田一家と荒瀬家の関係

私たち溝田一家(両親と姉弟の5大家族)は、昭和20年3月東京の吉祥寺から旧広島県双三郡川地村下川立の荒瀬家の旧宅に疎開した。戦争の爆撃などがひどくなり東京は危険だということで、母の長姉(喜代、秀俊の妻)の嫁ぎ先であった荒瀬家の旧宅が広いので、受け入れてくれるということでお世話になったのであった。昭和39年夏までの19年と5ヶ月の間そこに住まわせてもらった。伯母は若

いころ大変な美人で、新宿小町と言われていたそうで、近くの東京医専の学生だった伯父が見初めて結婚したと聞いている。

溝田千代子(2017年100歳と11ヶ月で没)の話によると、関東大震災(1923(大正12)年9月1日)の直後は、1週間ほど東大久保の東京医大運動場に避難して、交通混乱のため帰るのが遅れた父を待って、野宿をしていたそうである。その頃、流された風評で外国人が日本人の井戸に毒薬を流して騒乱を起こすというのがあって、皆不安であった。しかし、当時東京医専に勤務していた荒瀬秀俊は、「そんなことはないので安心するように」と言って回ってくれていたそうである。

### 6.3 佐藤英子(旧姓 溝田英子)の記憶

我々が川立に移った昭和20年3月末には長姉英子は満6歳である。4月から小学生になった。その年の終戦直後、9月12日には、オランダ人収容者の一団は三次の地を離れ福塩線経由で帰国の途についている。三次を離れる直前に秀俊は、手術を受けたブラウワ婦人を含む主だったオランダ人を自宅に招いて送別会を行っている。このことは児玉ハズエ看護婦長の話として、文献<sup>9)</sup>に記述されている。また秀治君の母、荒瀬慶子の話として文献<sup>4)</sup>には“軍医さんも看護婦さんもここに来るのが楽しみだったようで、5、6人でよく来ていました”、とある。また“送別会には荒瀬家によく出入りしていたメレマ軍医らや看護婦10名余りが招かれ久しぶりのごちそうに舌鼓をうった”ことが記されている。

英子はその頃の記憶として、ある時、荒瀬家を訪ね居間兼食堂に入ると突然の大きな外国人が数人いて驚いて泣きだしたそうである。するとその内の一人がキリンとゾウの縫いぐるみを渡して慰めてくれたそうである。その頃小学1年生の英子は、夏休みでない限り日

曜日しか10km以上離れた三次の荒瀬病院に行けないはずである。外国人が数人いたというその日は終戦の年の1945年4月から9月のことであろう。8月には原爆の被害者診療などで、伯父たちは忙殺されていたであろう。当時西洋人が三次にいたというのはこのオランダ人たち以外に考えられないので、事実と記憶が符合する。二つのぬいぐるみは、その後、遊んで壊れ、しばらくは下川立の家にあったが既に廃棄してしまった。もちろん、このような国際的事件に関連したものだとは思ひもしなかった。

### 6.4 荒瀬の伯父ちゃん

私たちは、荒瀬の「おじちゃん」と呼んでいた、伯父は、先に書かれているように怖い人だったようで、家族や親戚の大人たちは一目も二目も置いて気を使う相手であったことは子供の目にも分かった。しかし、疎開時に3歳だった忠人は、その後も特に怖いと思ったことは無く、興味深い面白いおじいさんという感じであった。

#### 6.4.1 患者としてお世話になったこと

川立に引越してから、肌の弱かった私は、終戦直後の食料事情も悪く、抵抗力がなかったのだろう、夏になると虫刺されの跡が化膿し両足全体に包帯を巻いているような弱い子供だった。その手当を荒瀬病院でやってもらっていた。包帯をほどいて薬を塗ってまた包帯をしてもらうだけだったが、包帯に膿が固まって着いており、はがすときはかさぶたがはがれて血が出る始末で泣きべそをかいていた。その処置をやさしくやってくれていたのが児玉婦長さんだった。小学校に上がり3年生くらいになると抵抗力がついたのかそういうことも無くなった。

4年生の時には、今考えるとおそらく夏休



みに川で泳ぎすぎて体力を失ったのか、秋になって微熱が続き下がらなくなった。荒瀬病院でレントゲンを撮ってもらったら「肺門リンパ腺炎」という結核の入り口の病気になっていた。幸い当時ストレプトマイシンという抗生物質が使えて、1カ月間荒瀬病院に泊まり込んで、朝晩その注射をお尻に打ってもらい完治することができた。こういう新薬が使えたといっても決して当時是一般的ではなく、伯父の絶大な援助があって措置してもらったものであろう。後で、「結核の影が残ると健康診断でいつも引っかかるから、そうならなくてよかった」と伯父に言われた。荒瀬病院に泊まっている時は朝夕体温を測ったが、特に夕方の検温が下がらず37℃を越してしまう。だんだん耐え切れなくなって、検温中に体温計をわざとずらせて低く見せようとして、低すぎてばれたりして怒られた。平熱に戻った時はみんなが喜んでくれたのが忘れられない。この間学校にも行かず荒瀬家の一員と寝食を共にしたので、暇があった。伯父の蔵書から銭形平次捕物帖を抜き出しては読んだ。

当時は「肺病」と呼ぶ結核を患っている人も多く子供が罹患することも多かったろう。川地小学校1年生の時担任の若い美人のT先生が教室でせき込んでハンカチに真っ赤に血がついていたのを見た。その後先生は休職して、おばあちゃん先生(子供の目にとって年配のその先生は、後に三次で開業される**箕岡先生のお母様**です。)に代わったので、ちょっと残念だった。

今では考えられないことだが、伯父が「忠人、今から手術をするが見るか」と言われたことが何度かあり、その都度私は見せてもらった。たいがい「盲腸」の手術だったが、ある時など、若いきれいなお姉さんが横たわっており、そのお腹を開けて最終的に伯父が手にしたのは、大人の握りこぶしほどの

血のついた球体だった。後から考えると子宮筋腫の切除だった。伯父は、その患者に「もう大丈夫だ、子供も産めるで」と言っていたように覚えている。どうも、私に興味をひかせて、医者になって欲しいと思っていたらしかった。

#### 6.4.2 伯父のものづくり

ものづくりの上手い人で、自分の道具であるメスを自作したが、極めて小さいとがったメスは耳鼻科の手術に使うと言っていた。また、東京医大の先生(英子談)に進呈するのだといって、特に念入りに作ったものは、金メッキを施していた。四角い普通の金魚鉢のメッキ浴槽の中のメッキ液は濃い緑色できれいだった。蓄電池の電源につないでメスと陽極の金板が沈められ、出来上がると美しい金色のメスであった。メスは一般の鋼材から作るのではなく、刃は日本刀を切断して切り出し磨いて作り、持ち手は真鍮などで作っていた。刃の部分をはめ込んで、ピン止めして叩いてカシメつけ磨き上げ、更にメッキを施すと、一体になってきれいであった。出来上がるとメスを自分の後ろ頭の毛の所(ちなみに伯父は当時てっぺんに毛はなかった)に触れさせて切れ味を見ていた。その動作が何のことか分からず、坊主頭の私がまねしてメスを頭に持って行った時はびっくりするような声で危ないと咎められた。その声のほうがよっぽど危なかった。剃刀のように毛をそれるところまで刃を磨いていたのだった。

その他、アユの友釣り用の生きアユを入れる箱も自分で考えてブリキ屋さんに作ってもらったもので、釣りをしながら簡単にアユが入れられ、かつ簡単には逃げないような仕掛けがしてあった。

### 6.4.3 英語の質問など、伯父の悲喜こもごも

中学・高校生ころになると、一緒に食事すると、秀治の記述にもあるように、従兄たちと同じで、英語の試験が始まるのだった。「大根はなんというか」「ヒョウはなんというか」などと難問に発展するので往生した。しかし、ちゃっかり御馳走はいただくことができた。

私が大学生になって、三次から離れている時に伯父は亡くなった。心臓、肝臓などに病を抱え、私が3月の末に大学に戻るので最後に別れた時はかなり重体で、発語も難しかったが、枕もとの私には「忠人…」と聞こえたように覚えている。伯父は、「医者には病人を治すために半分手助けするだけだ、あとの半分は患者の生命力で治るのだ」と含蓄のある事を言っていた。

明治の人には当たり前であろうが、天皇がテレビに映ると、「テレビに写すなど不敬である、けしからん」と言い、テレビの前に正座して頭を下げ、時に涙を浮かべていたそうだ。

広島の前爆直後の救援に三次の医師団長として行き医療活動を行った<sup>7)</sup>次男の敏博(当時医学生)と児玉婦長も同行した。軍人にもいろいろあって、「俺は軍人だ、早く診察しろ。」と要求する人もあれば、ひどい怪我にもかかわらず黙って順番を守る人もいた。」と聞いた。伯父と従兄については確認していないが、児玉婦長は原爆手帳を持っていた。

敏博兄は柔道4段で、医専を卒業し荒瀬病院を手伝い始めたころ出身の三次高校に出向いて稽古に加わり、高校生の主将らをぶん投げていたとか。

伯父は、晩年、閉所恐怖症に悩まされていた、夜寝ている時などにパニック症状が出る事があったようだ。周りの話しでは、被爆者診療に行った時に受けた精神的、肉体的

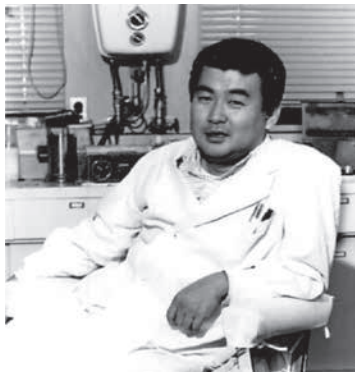
ショックのせいではないかと言っていたが、パイオニア的な外科医として恐らく多くの修羅場を経験し、外面に反して決して豪胆なばかりでない伯父は相当なストレスに耐えて生きていたのではないかと思う。

晩年、あちこち体を悪くする中で、便秘に悩まされていたようで、ある時、便所に半紙の張り紙がしてあった、正確な文面は記憶していないが、「久しぶりに出るものが出てこんな良い気分のものは無い」という俳句のようなものだった。トイレまで紙と筆を伯母に持ってこさせて書いたのだそうだ、皆が陰で笑っていた。

### 6.4.4 秀賢君とのこと

故荒瀬秀賢君との記憶も書いておきたい。彼は、諸事情で幼児期から小学生まで祖父母の下で両親から離れて育てられた。病院と一体の家の中で、唯一の子供であり、相手をしてくれる人の多くが病院スタッフであり、特にコブちゃん(児玉婦長をそう呼んでいた)は彼をかわいがっていた。従って、小学校に入る前まで、他の人から「ぼっちゃん」と呼ばれるので、自分のことをそう呼んでいた。さすがに、周りが学校に上がるまでには直そうと努力していたがなかなか修正できず、我々にもその手伝いが命じ(?)られた。彼は、川立の家に来ると我々のような子供の遊び相手があり、特に正面に芸備線のSLが見える家なので、汽車の通るのをことのほか楽しみにして、汽笛が聞こえると、縁側に走って行き、飽きず眺めて、長い貨物列車の車両数を数えていた。「ぼっちゃん」もすぐに治った。水泳も裏の可愛川(えのかわ)で我々に教わってできるようになった。4年生になって、ローマ字がなかなか覚えられないので、何とかしてと、そのころは母の慶子さんも一緒に住むようになっていたろうか、頼まれた。川立で

は絵は描いていたが勉強はしていなかったので、どうしようか考えた末に、彼の好きな広島カープの選手の名前（当時はKOZURU、SHIRAIISHI、HASEGAWA等だったろうか）をローマ字で書いて見せたら、がぜん興味を示して、いろんな選手の名前をどう書くか尋ね始め、あっという間にローマ字をマスターしてしまった。汽車とカープ、彼の生涯の趣味(?)の2つの根っこは既にそのころには確立していたようだ。



ある日の診察室にて



下川立町旧荒瀬邸前にてピッチング

## 6.5 荒瀬家との思い出

### 6.5.1 荒瀬秀俊伯父にはお世話になった

武人が小学生の頃であるが、軍服を着た大きな外国人が4、5名やって来て秀俊伯父と歓談しようとして応接間に入ろうとするので、中にいた私は出て行ったという記憶が私にはある。伯母達が応接間に飲み物などを運び込

んでいた。この時期にオランダ人が訪ねて来たという記録は見当たらないので、別グループだったのかも知れないのだが、疑問のままである。

小学校の1年生の時、可愛川で水遊びをしていて、武人は中耳炎になった。2年生になって、右耳の裏側を切開する手術を秀俊伯父にしてもらった。局部麻酔の厳しい手術であった。自作のメスで切開して鉛のハンマーでノミを叩いて骨を削り取る音や術後のガーゼ替えの嫌な感覚は、今でもよみがえる。

そこはオランダ人を手術した7年後の同じ手術室である。その手術から12年後、大学付属病院で右慢性中耳炎術後症と診断されて大学1年と3年の夏に2度の手術を受けた。その時の担当医は、「12年前にこれだけの手術をする医者はなかなかいなかったはずです」と、伯父の手術を称賛した。今でも耳のことではなんとかなっているのは、伯父達のおかげである。

三次の荒瀬病院の中庭には大きな池があり、四六時中冷たい井戸水が注がれていた。深い方には、1m近い山椒魚(ハンザケ)が何匹もいて、浅い方には鮎や鯉が泳いでいた。中庭の檻にはニホンザルが飼われていた。廊下にはウズラが伯父自作の竹籠の中に居た。フクロウも飼われていてホ〜という呼びかけに応えていた。確かムササビも居た。

伯父は猟銃だけでなく、空気銃も持っていた。庭に飼っていたニホンザルの小屋に寄って来る蠅を、空砲で縁側から撃ち落としたり、部屋の天井の隅に止まっている蠅もこれで撃ち落としたりして楽しんでた。空砲から発射される空気の渦は遠方まで正確に直進することを知っていて、空気の渦を弾の代わりに使っていたのである。

狩猟のために別の庭には猟犬が10匹近くは飼われていた。そこで生まれた子犬を川立に

もらって番犬として飼っていた。ゴールという真っ黒で大きな犬の時は、体重の軽い私は背中に抱きついて乗って歩かせていた。そんな訳で「犬好きか」と聞かれたら、「別に犬を好きという訳ではないが、犬が私を好きだからね」と応えている。その犬との生活で忘れられない伯父との会話がある。

伯父は博識だったので、ある時自分がこの眼で見たことをぶつけてみた。川立の荒瀬旧邸の真正面には茶白山という山があり、その麓には芸備線が横断している。その下の田んぼに続く芝の斜面は我々の格好の遊び場であった。あの頃の冬は雪も良く積った。早春になって雪が消えて芝地になっても、手製のそりで遊ぶことに熱中した。その日は、その頃飼っていた猟犬のチヌを連れて川立の大勢の仲間と一緒に遊んでいた。チヌは子供達と一緒に走り回っていたが、やがてソリで滑りはじめようとした私の隣に来て、行儀よく犬座りをした。私が滑り始めると、そのままチヌも前足だけの動作で尻滑りを始めて一緒に滑って降りて来る。こいつは人間と一緒に遊びに参加しているな、と驚いた。そこで、その観察を伯父に伝えた。「伯父ちゃん、犬と一緒に遊んでいる積りかねえ」。伯父は、「それはその通りだね。自分が猟をする時に、賢い猟犬はハンターが撃ち易い方向に雉を飛び立たせてくれるからね」。と言った。それからは犬に一目置くようになった。

伯父は川釣りが大好きで、晩年には浅瀬に椅子を置いてそこに腰かけてまでハヤ釣りを楽しんでいた。ある時は川立の可愛川の対岸に行く途中の土手道で幼なじみの永木のお婆さんに会って立ち話を始めた。永木のお婆さんは親戚でもなんでもないが、身寄りも無かったからか、旧荒瀬邸の一隅に住んでいた。その時、お互い60歳はとうに過ぎていたけれど、「過ぎてみれば人生はアッという間だね

え」と、しみじみした口調で言った。17歳の頃の私は、人生とはそういうものなのだ、と痛く感じ入った。

## 6.5.2 荒瀬敏博兄にはなにかと可愛がって頂いた

敏博兄も狩猟や河釣りが趣味でその様子は文献<sup>21)</sup>からも知ることができる。高級なバイクと猟銃とカメラを持っていて、それがいずれもドイツ製なのだと自慢していたことがある。ドイツ製はステータスシンボルなのだと刷り込まれた。後年、ライカM3のカメラをドイツで買って来たが、飾り物になっている。

小学校3年生の時は、武人は風邪を引きやすい体質であったことを改善するため扁桃摘出手術を敏博兄がしてくれた。その手術中に脳貧血を起こして気が遠くなったので、片側摘出後一時中断して気を取り直してもう片方も摘出した。耳の治療を受けたある時、「武人、今夜はイダ釣りに行くから、イナゴを獲って来とけ」、という。私は、旭橋を渡って寺戸の田んぼでイナゴを獲ってきた。祝橋下流の尾関山の近くの江の川の深みでの夜釣りでは40～50cm級のイダが釣れた。

またある真冬の夜の遅い時間に、川立の外堀の門をドンドン叩く人がいる。母千代子が、「どちらさんですか」と、訝しげに聞く。すると、「ワシャあ川地の狸じゃ」、と敏博兄の声が聞こえて来て、なあんだとホッとしたことがあった。あくる早朝から狩猟をするために川立の家に泊りに来たのである。

三次高校に通っている時は、十日市に住む敏博兄の家に泊めてもらうことが良くあった。そんなある日、敏博兄が私にお弁当を作ってくれたことがあったらしい。晩年になって、敏博兄から、「わしゃ武人に弁当を作ったことがあるのだけど、覚えているか?」、と言われて恐縮した。私は全く覚えていなかった

のである。その後も何度か手紙を貰って、分家して十日市荒瀬病院を始めたいきさつを知らせてくれたり、私の就職を祝ってくれたり、何かと温かく気を掛けてもらった。

### 6.5.3 荒瀬秀賢、秀治兄弟との縁

毎年正月2日には川立から一家で荒瀬に年賀の挨拶に行く。武人の記憶ではっきりしていることがある。白衣の大きな人が、赤ちゃんを白いタオル地で包んで抱いている。私は赤ちゃんの顔を見たいのだが、見えない、というシーンである。後々考えると、それは私が2歳11カ月の正月で、生まれたばかりの秀賢君と彼を抱いた児玉婦長さんだったのである。これが私の人生で一番古い記憶である。

その秀賢君とは三次でも川立でも至る所で一緒に遊んだ。とりわけ川遊びには熱中した。三次では、可愛川が江の川に合流する辺りでハヤの瀬釣りをしに行った。そんな朝は早く起きるので、自分たちで朝食をつくる。秀賢君がフライパンを使って、ご飯をバターで炒めながら生卵を落とした炒めた朝食を用意してくれた。なかなか美味しかった。

夏の時期、川立では本流の可愛川の上流で赤痢が発生して、深川橋辺りは遊泳禁止になることが時々あった。そんな時は支流の長屋川の沢登り遊びをしながら、“清水～ドンド



楽しかった川遊び 可愛川、深川橋の上流  
昭和35(1960)年8月  
左端：秀賢、中央：秀治

ン”と言われていた澱みまで出かけて遊んだ。

お互い50歳を過ぎた頃、秀賢君から一枚の絵が送られてきた。「どうしても武ちゃんに見せたいので送った」、というのである。それは、イラストレーター西口 保氏による“日本の四季、川で遊ぶ子供たちの風景”という作品で、カレンダーの絵だった。我々の子供時代の原風景そのものであった。

秀賢君は2019年1月11日に札幌の病院で亡くなった。おそらく息を引き取る12時間位まえであろうが、11日の早朝に、私は夢を見た。秀賢君がベッドの上に半起になって、「武ちゃん、会いたいのだけど会いに行けんのよお、会いに来てくれんかのう」、というのである。年が明けてどうしているかと気になっていたからこんな夢を見たのだろう、と目が覚めてから思った。しかし、その日の夕方訃報が届いた。時々こういう話は聞くけれど、自分も本当に体験したのである。

秀治君には兄・秀賢君の葬儀の日に久し振りに会った。おそらく数十年振りであろう。駐車場にいたら遠くから「溝田さん、溝田さん」と呼ぶ人がいて、友人のようだけど誰かいなと思った。奥さんの淳子さんとアウチャン(秀治の幼児期の呼び名)がゆっくりと歩いて来た。さっきも呼んだのだけど私が気づかなかったという。私は「お互いこの歳だけど秀治君に溝田さんと呼ばれる筋はないよねえ、アウチャン武ちゃんだよね」、と言ったら奥さんの淳子さん共々笑い出した。



小学生時代の荒瀬秀治 昭和36(1961)年1月

## 7. 編集後記－秀治君の原稿を編集して

この文章は、荒瀬秀俊の孫である荒瀬秀治（平成31（2019）年2月6日他界）が亡くなる直前に書き残した原稿を基に編集したものである。作業をしたのは、秀治君の父、荒瀬秀隆の母方の従弟の溝田忠人・武人兄弟である。既に病が重症と思われる秀治君が原稿の50ページ以上をパソコンで書いていたが、完結させる時間がないことを悟り淳子夫人を通して、幼なじみでもあった我々に委託したのである。病状が悪化する中、執筆は大変だったと思われ、書き直そうと努力するもコピーした部分を直しきれないで、次々にペーストし積み重なってしまったような状態であった。しかも、秀治君の兄秀賢君は秀治の死の約1月にも満たない前、平成31年1月11日に逝去しており、三次に存在したこの戦時中の貴重な経験の当事者、荒瀬秀俊の直系である秀治君をおいてこの史実の記述に手を付ける適任者はいない状態を意識してのことだろう。（我々は、両君のことを秀賢ちゃん、秀治ちゃんと呼び、秀治ちゃんのことはアウチャンとも呼んでいた。アウチャンは、赤ん坊の時皆からそう呼ばれていたからである）。

秀賢君の葬儀の日、平成31年1月14日に秀治君は病魔と闘いながらも淳子夫人に支えられて参列した。その控え室で、この文書の完成が近い、ことを我々に話した。我々は、それは貴重な文書に違いないので、頑張って完成させるようにと励ました。しかし秀治君の努力はすでに限界に近く、1カ月も経たず亡くなった。

従って、三次のオランダ人収容者の記述などに関しては三神国隆氏の文献<sup>6)</sup>を読んで書いている部分も多いと思われる。児玉婦長から聞いた話との区別が判然としないところが多くあった、編集者の責任で、なるべく引用符を付けたが、はっきりしない点も多かった。

この文書のタイトルは、2.10の中の記述、「外科医のメスに国境はない」から採っている。赤十字の精神は以前からあり、秀俊伯父も十分心得ていたであろう。今では“国境なき医師団”という世界的な組織もある。しかし、1944年当時の日本の国粋主義の厳しい時代に“外科医のメスに国境はない”という考え方を交戦相手国の収容者に対して実行した気概は、明治生れながら赤十字精神に加えて古武士の精神を持ち合わせていたことを示している。

この出来事に関してオランダ側の当事者が遺した文書を、オランダ国立公文書館からジャーナリスト三神国隆氏が取り寄せた。その資料やその他の資料をもとに米丸嘉一先生（溝田武人の三次高校時代の恩師）がまとめた論文<sup>4)</sup>は決して長くはないが密度の濃い内容にまとめられている。小宮まゆみ氏は文献<sup>13)</sup>で収容者として三次で暮らしたオランダ人軍医の子息との奇跡の出会いを果たしたという報告を行っている。それに対して秀治文書は、もう一方の当事者である荒瀬秀俊、児玉ハズエ看護婦長側からの証言を含んでいる。

我々は、秀治君より少し年長であり、秀賢、秀治兄弟がまだ就学前から小学生の時代、兄貴分として我々の住まい荒瀬家の旧宅（現、三次市下川立町）に遊びに来る彼らに可愛川（えのかわ）の深川橋付近は格好の遊び場であり、水泳、石投げ、お絵描き、山菜取り、花摘み、魚釣り、魚とり、などして遊んだ仲であった。当然、秀俊伯父にも大変世話になった。従って、伯父の人間像を示す思い出を、我々の姉、佐藤英子の記憶も含めて6に付け加えた。

## 8. 謝辞

この文書をまとめるに際して、多くの方々にご協力を頂いた。米丸嘉一先生には、原稿

を読んで多くの有益なご助言を頂いた。またタンゲナ鈴木由香里(POW研究会)、小宮まゆみ(POW研究会、元高校教諭)のお二人には原稿を読んで頂き、英文化して公開すべき、という貴重なご助言と激励を賜った。現在、英文化はほぼ終わっている。小宮まゆみさんからは文献<sup>19)</sup>および米丸先生と荒瀬家を訪問されたとき撮影された写真の提供頂いた。また、現在荒瀬外科の玄関に置いてある人力車も訪問者には珍しく、その写真もいただいた。三神國隆氏には、文献<sup>6)</sup>との関係で、原稿を読んでいただき、特に、オプ・テン・ノール号が拿捕された日付を2月26日と明記すること、オランダ人達は民間人であり戦闘員ではないので捕虜とか捕虜収容所という言葉は使わないこと、手術のためオランダ人看護婦ブラウワさんを三次収容所から荒瀬病院に移送したとき使ったのは布団を敷いたリヤカーであったこと(秀治の記述では担架となっていた)など、貴重なご指摘をいただいた。三神國隆氏の荒瀬秀俊評は“なにしろ快男児です”ということであった。

三次市立図書館館長有光七重様、君田図書館加島様には文献<sup>2)</sup>や種々の新聞資料を送って頂いた。東京医科大学図書館野坂美恵子、戸村裕菜、工藤 彩様の方々にはラウベル解剖学教科書を見事に探し当てて頂いた。さらに荒瀬敏博の文書も見つけて下さった。ゲオルク・ティーメ社のBarbara Eliasさんに

は文献<sup>20)</sup>から転載することの許諾を頂いた。東京医科大学医学部医学科同窓会事務長の長谷美地様は文献<sup>21)</sup>からの転載を許可して下さいました。

秀治君の従兄弟にあたる澤 裕幸、能美(旧姓、澤)洋子、坂根(旧姓、澤)玲子氏の兄姉妹には編集者の議論に何度も協力して頂いた。また秀治君の妻・淳子さんと、秀賢君の妻・妙子さんからは数々の貴重な写真などを多数提供頂いた。それぞれ、この文書の完成を心から待ち望んで各種のご助言ご協力を惜しまれなかった。

荒瀬秀俊の描いた人体頭部解剖図やその基になったラウベル解剖学教科書の原画、さらに秀俊自作のメスなどは、東京医大に寄贈し、または、地元三次市を含めてしかるべき受け入れ機関のご理解が得られれば、保存・展示等していただければと親族関係者は願っている。

秀治君も最後の所で書いているように、この出来事がこのような結果に終わっていなかったら、東京裁判に掛けられおそらく、不名誉な結果が後世に伝わったことだろう。その意味でも荒瀬秀俊の判断と行動は末永く後世に伝えられるべきものと考えます。

末筆ながら、相次いで亡くなった荒瀬秀賢、秀治兄弟のご冥福を心から祈ります。この文書の完成にご協力下さった皆様方に編集者は深く感謝いたします。

#### 引用文献

1. 溝田武人、荒瀬病院旧邸代主に関するある伝聞について、巴杏、三次地区医師会会報、No.164、pp.21-26、2018.10
2. げいびグラフ、巻頭人物風土記、荒瀬秀俊、(株)菁文社、第44号、昭和61(1986)年7月5日発行
3. 支局ノート、戦争の不条理伝える抑留所<三次>、中国新聞北部版p.27、平成12年、2000.9.8
4. 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所について-オランダ国立公文書館文書から-：三次地方史、第54号、2000.9.20三次地方史研究会発行
5. 平和を考える、三次英米人抑留所の貴重な写真、欧米流の交流の礎に、朝日新聞広島版、2009(平成21年)10月7日
6. 三神國隆、海軍病院はなぜ沈められたか-第二氷川丸の航跡-、光人社、ISBN 4-7698-2443-2 c0195、2005.1.15

7. 「つらかった収容所の生活」オランダ人元捕虜32年ぶり三次訪れる、中国新聞、昭和53(1973)年1月29日
8. 朝刊コラム、ほのぼの欄、国境越えた良心のメス、中国新聞1990.2.2、p.26
9. 20世紀スポット、㊟三次の抑留所・捕虜収容所、戦時下に園舎が変ぼう、国境を越えて交流芽生える、中国新聞、平成12年、2000.8.23
10. 贅澤な“海の病院”、皮肉や自国の捕虜を満載輸送、抑留下の和蘭病院船、朝日新聞、昭和17(1942)年4月2日
11. 三次捕虜収容所スケッチ、オランダ人の鉛筆画、市にコピーを寄贈、中国新聞、平成29(2017)年6月1日
12. もうひとつのヒロシマ99、再建への鼓動26、被爆者に乾パン配る、中国新聞、昭和59(1984)年10月8日
13. 小宮まゆみ、三次の民間人抑留所をめぐるヤン・クワフェルデンさんとの交流、P O W研究会、Dialog JI、2018.01.18
14. 荒瀬秀隆、春山広臣：乳腺結核2例、日本臨床結核、Vol.10、No.10、pp.546～548、1951-10
15. 春山広臣、荒瀬 秀隆：腎盂尿管畸形に依る外科的疾患について、臨床外科、Vol.7、No.13、pp.773～774、1952-12
16. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、日本外科学会雑誌、Vol.58、No.9、pp.1406～1423、1957-12
17. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、東京医科大学、医学博士、学位授与年月日：1957-07-26
18. 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所-オランダ国立公文書館文書から-、げいびグラフ、ふるさと歴史物語、第85号、平成12(2000)年11月10日発行
19. 小宮まゆみ：敵国人抑留-戦時下の外国民間人-、吉川弘文館(歴史文化ライブラリー267)、2009.2
20. A. Rauber, et al., Lehrbuch der Anatomie des Menschen ; Abteilung 3: Muskeln, Gefasse. pp.87-98, Neunte Yermehrte und Verbesserte Auflage. Georg Thieme, Leipzig, 1911. (A.ラウベルら著：人体の解剖学教科書 部門3：筋肉、血管、pp.87-98、第9版は増加版と改良版を含む。ゲオルク・ティエメ社, Leipzig, 1911.)
21. 荒瀬敏博、親父、秀俊の思い出、東京医科大学同窓会 広島県支部の歩み、pp.131-134、1989
22. 東京医科大學百年史1916-2016、東京医科大学創立100周年記念事業記念誌委員会、平成30(2018)年。
23. オランダ人抑留刻んだスケッチ、朝日新聞大阪版夕刊、2017.6.24

